

## (1) 基本的に

応急処置の原則は、「遠くに強く引く」。足甲の痛みには、頭が遠くとして使われることがある。頭刺は足甲の遠くとして使われるだけでなく、過敏状態を鎮めるためにも使われる。運動器系の痛みでも神経過敏な状態が関係していそうなときに、前半の準備の後に頭のツボに刺鍼して、そのまま置鍼し、後始末の前に抜鍼するという手順で使う。

頭のツボの分布と経絡の関係は、頭のハチマキをする辺りが陽経、その内側から頭頂部にかけてが陰経、頭の右側は右半身、左側は左半身のツボが出る。頭のハチマキをする辺りの前側は陽明、横は少陽、後ろは太陽。ハチマキをする辺りの内側から頭頂部は厥陰の領域だが、前側は太陰、後ろ側は少陰。

過敏症状に頭刺を使うときには、経絡的なことを考えながら、一番痛い所と天から見て重なる辺りの頭の部分を探すとツボが見付けやすい。

頭のツボは表面の皮膚がブヨブヨしていて、押すとぺっこり凹むのが特徴で、古いツボ程ブヨブヨしている所が広がる。

## (2) 足甲の痛みに対する頭刺

まず、症状確認。足甲は、だいたい、2-3間が陽明、3-4間が少陽、4-5間が太陽、1-2間は頭頂部の厥陰。なので、痛む位置の左右、陰陽、前横後ろからツボが出ていそうな所の見当を付け、頭を手で触れて凹んでブヨブヨした所を探す。

選んだ頭のツボに経絡的に関連する手甲にツボを探して引き鍼。患部が足甲の1-2間などで陰経側のときには、頭のツボも手のツボも陰経側になるので、表裏反対側の陽経の手甲のツボに引き鍼してから、手首近くの列缺・内関・陰郛などに引き鍼（「陽→陰→陽」の原則）。手平は痛いので、手の陰経のときには手首近くのツボを使う。

手に引いた後に、探しておいた頭のツボに刺鍼。このときに足がブラブラする高さの座位で患部の足を動かすと運動鍼になる。刺鍼後に患部を動かしてみて痛みが減っていたら、痛みが足甲の他の所に移っていないか、触ったり動かしてもらったりして調べ、痛みが移っていたら、そこから頭のツボを予測して頭を手で触れてツボを探し、見付けたツボに頭刺。足甲を動かしたりしても痛みが余り出てこなくなるまで繰り返す。

しばらく刺鍼しても痛みが減らないときには、そこに鍼を置鍼し、患部の刺鍼、経絡的に関連する所への刺鍼、動作鍼、巨刺、上下刺、対角刺などをするとよい。そのときには、頭に置鍼した鍼を抜いてから後始末に入る。

後始末は、頭に散鍼し、手甲に引き鍼。

## (3) 過敏症候群に対する頭刺

治療を始める前の話しぶりなどから興奮しているような感じや、物事に過敏そうな感じを受けたときには、患部の他にも頭の様子を調べさせてもらう。痛みに対する感受性が過敏になっているときには痛みを強く感じることもあり、そういうときには患部だけでなく、頭のツボを調べて刺鍼するとホッとした感じになり、痛みに対する感受性が適度になり、辛さが減ることが多い。説明した上で頭を調べさせてもらい、ツボが出ていたら、頭刺も取り入れた応急処置をする。心も辛い状況なので、痛みに対する感受性を高くして、それ以上に辛いことを感じなくても済むようにしていることを理解してもらうことが大切。「あなたの痛みは気のせいだ」と言ったらと誤解されないような注意が必要。

手順は、前半の準備として、手足甲に引き鍼した後に頭のツボに刺鍼し、しばらく刺鍼しても反応が治まらない所には置鍼(2,3か所)。その後、患部や経絡的に関連する所への刺鍼、動作鍼、巨刺などをして、十分に応急処置が済んだら、頭に置鍼した鍼を抜き、後始末として必要なら頭に散鍼してから手足の甲に引き鍼して仕上げる。

## 要点

- ① 頭のツボは、患部と天から見て重なる所
- ② 足甲の痛みを遠くに引くには、頭刺もある
- ③ 過敏状態には、応急処置に頭刺を組み入れる